

『クリスマス・キャロル』の生と死

道家英穂

1 クリスマスのゴースト・ストーリー

ディケンズの『クリスマス・キャロル』(1843年)は、守銭奴スクルージのもとに、かつての共同経営者マーリーの亡霊が現れ、ついでマーリーの遣わした過去、現在、未来のクリスマスの霊が、それぞれスクルージを時空の旅に連れて行く、そしてその結果、この偏屈な老人が改心するという話である。発表当時から大変な評判を呼んだこの作品は、クリスマスの楽しくて心温まる雰囲気を実現した物語として、現在も広く親しまれている。

しかしながらこの『クリスマス・キャロル』の冒頭では、「死んでいる」(dead)という言葉が執拗に繰り返される。「最初に言うておくが、マーリーは死んでいる。そのことには何の疑いもない」という出だしでこの物語は始まる。つぎの段落は「老マーリーはドア釘のように死んでいる」という1行のみ。改行があって、死んでいるもののたとえとしてはドア釘より棺桶の釘の方がふさわしいようにも思うのだが、このおきまりの比喩には先祖の知恵が込められているので、勝手に言葉を乱すことはできない、と語り手は言い、もう一度「マーリーはドア釘のように死んでいる」と繰り返す。スクルージもマーリーが死んだことをよく承知していたと語り手は強調した上で、『ハムレット』を引き合いに出す。

マリーが死んでいることには一点の疑いもない。このことをはっきり理解しておいてもらわないと、これからお話しする物語が不思議(wonderful)でも何でもなくなってしまう。ハムレットの父親がああ劇の始まる前に死んでいたということをよく承知しておかなかったら、夜、東風の吹くなか、その父親が自分の城の城壁の上をうろついたところで目を見張ることは何もない。そこらの中年紳士が気弱な息子を驚かそうと、暗くなってから向こう見ずにも、どこか吹きさらしの場所に一たとえばセント・ポール寺院の境内にでも一出かけていくのと変わらないことになってしまう。¹⁾(33-34頁)

『ハムレット』の亡霊への言及により、これから始まる物語にマリーが亡霊となって出てくることが暗示される。語り手は『ハムレット』同様、この物語もリアルな亡霊が登場する「不思議・驚異的」な話なのだと主張しているのである。だがそのユーモラスな語り口がこの物語とシェイクスピア悲劇との乖離を示している。

ここではハムレットに加え、もうひとつセント・ポール寺院という固有名詞が挙がっている。なぜ中年紳士が気弱な息子を驚かす場所としてセント・ポール寺院の境内が例に挙げられているのだろうか？実はセント・ポール寺院は、有名な偽^{にせ}の亡霊事件を連想させる場所なのである。

1761年の暮れから翌年の正月にかけて、この寺院の近くのコック・レインという路地に面した家で、夜半になると物をたたいたりひっかいたりする音が響き渡った。家主のリチャード・パーソンズは、これを以前の借家人でその後亡くなったファニー・リンズの亡霊であり、ファニーは同居していた内縁の夫ウィリアム・ケントに殺害されたと主張。セント・ポール寺院の境内にある新聞社『パブリック・レジャー』(*The Public Ledger*)が事件を報じたことから、この話はロンドン中に知れ渡ることになる。

パーソンズは入場料を取って、この亡霊を呼ぶ降霊会を開く。毎晩の降

霊会には多くの人がつめかけた。やがてロンドン市長の命によって調査委員会が形成される。それにより不審な物音はパーソンズの娘ベティがたてていたことが発覚。パーソンズはウィリアム・ケントに借金がありその返済を迫られていた。

諷刺画家のホガースは「軽信、迷信、狂信」と題する版画でこの事件をとりあげ、詩人のチャールズ・チャーチルは「亡霊」という諷刺詩で、調査委員会に加わった文壇の大御所サミュエル・ジョンソンを、茶番劇に一役買ったとして嘲笑。また「コック・レインのいかさま」(‘Cock Lane, Humbug’)と題するブロードサイド・バラッド(片面刷りの紙に印刷された俗謡)が出回った²⁾。

ディケンズは『二都物語』冒頭において、揶揄する調子でこの亡霊事件に触れ、『ニコラス・ニクルビー』49章、『ドンビー父子』8章でも言及している。『クリスマス・キャロル』には直接の言及はないが、マーリーの亡霊が出現したとき、スクルージは初め信じようとせず、「ばかばかしい」(‘Humbug!’)、「やっぱりばかばかしい」(‘It’s humbug still!’)と繰り返している(43-44頁)。これはバラッド「コック・レインのいかさま(‘Cock Lane, Humbug’)」を踏まえた表現と考えられ、『クリスマス・キャロル』においてもコック・レインの亡霊が意識されていると断定してよいであろう。スクルージはマーリーの亡霊と対面し、相手を本物と認めることになるが、この亡霊にはコック・レインの偽^{にせ}の亡霊がオーバーラップするのである。

この作品にはさらに、やはり直接名前は挙がっていないものの、にせもの亡霊が登場する文学作品も踏まえられていると考えられる。ル・サージュの『悪魔アスモデ』(1707年)の7章に、ある宿屋の給仕が亡霊に扮して客や店の主人を驚かすエピソードがある。その給仕は夜中になると黒い外套に身を包み、焼き串を回す鎖を首に掛け、恐ろしい鎖の音をたてて現れるのだが、泊まり客の軍曹に打ち据えられて正体を明かすことにな

る。ディケンズは『悪魔アスモデ』を子供のときからトバイアス・スモレットによる英訳で愛読し、後述するように、現在のクリスマスの霊がスクルージにさまざまな人間模様を見せる場面は、この作品の設定に着想を得たのではないかと指摘されている。³⁾ (また『骨董屋』33章、『ドンビー父子』47章にはこの作品への直接の言及がある。) マーリーの死を強調し、その亡霊は人のいたずらではないことを主張しようとする先の引用において『悪魔アスモデ』7章の話が意識されている可能性も高いと言えよう。そして登場したマーリーの亡霊は『悪魔アスモデ』の給仕扮する亡霊同様、鎖を引きずっている。だがマーリーの鎖は、生前金儲けのことしか考えなかった彼の罪を反映して、「(スクルージはつぶさに観察したが) 鋼鉄を貯金箱、鍵、南京錠、帳簿、証書、重たい財布の形にして作られていた」(44頁)と、滑稽なまでに寓意的で、全くリアリティーを欠いたものになっている。このようにマーリーが死んでいるという「事実」を、ふざけた言い回しで繰り返し強調しながら、その背後に偽^{にせ}の亡霊の話^をを暗示し、その上で過剰に寓意的な亡霊を登場させることは、語り手の主張とは裏腹に、この物語全体の虚構性を読者に印象づける効果をもたらすのである。

ディケンズの「クリスマス・ツリー」やワシントン・アーヴィングの「クリスマス・ディナー」(『スケッチブック』⁴⁾)で語られているように、イギリスではクリスマスに怪談をすることになっている。この習慣は18世紀に始まり19世紀になって一般に広まった。暖炉を囲んで怪談を聞くことは、当時の人々にとっておきまりの余興のひとつになっていた。ディケンズは『クリスマス・キャロル』の副題を「クリスマスのゴースト・ストーリー」としたが、『クリスマス・キャロル』出版直後に出たアメリカの『サン』紙の書評には、「読者諸君、心して読みたまえ、そして、ゴースト・ストーリーだからといって、単なる空想のばかげた産物と思うなかれ」とある。⁵⁾ 『ハムレット』の亡霊が相応のリアリティーをもって観客に迫った17世紀とは異なり、当時の読者が怪談を基本的には荒唐無稽なものにとらえてい

たことがわかる。ディケンズは「信号手」というリアルなゴースト・ストーリーをのちのクリスマス（1866年）に書いているが、『クリスマス・キャロル』は、コック・レインの亡霊騒ぎや『悪魔アスマデア』のにせもののゴースト・ストーリーを踏まえながら、自ら本物と主張するあやしげなゴースト・ストーリー、つまりゴースト・ストーリーのパロディである。そこには、怖い話で楽しむのが習わしのクリスマスに、ユーモラスなゴースト・ストーリーを提供することで、一層クリスマスを楽しめるものにしてやうという意図が見てとれる。

だが『クリスマス・キャロル』の亡霊の評判は必ずしも良くはなかった。詩人エリザベス・バレット・ブラウニングは、この作品の発表直後、アメリカの詩人で小説家のメアリ・ラッセル・ミットフォードへの手紙で、「寓意と亡霊の類が絡み合ったあの仕掛けが好きではない」けれど、事務員のボブ・クラチットとその末息子のティムについての場面がすばらしく、心から作者に感謝すると言っている。ミットフォードはその1年半後、別の女性に宛てた手紙で、「私もディケンズの『クリスマス・キャロル』が大好き—もちろん亡霊のところじゃありません、あそこは全然良くないわ、でも事務員の家族の場面はとってもよくて感動的です⁶⁾」と言う。2人とも亡霊を作品の欠点とする一方、ボブとその家族の場面を評価していた。それに代表されるように、スクルージがクリスマスの霊たちに見せられる幻影はほとんどすべて現世の出来事である⁷⁾。ヴィクトリア時代の文筆家で教養ある読者であったこのふたりの女性は、『クリスマス・キャロル』に描かれた生身の人々に惹かれ、寓意的な亡霊はまやかしととらえたようだ。

2 『クリスマス・キャロル』の（非）宗教性

他方、この作品がクリスマスを扱っていながら宗教的でないとの批判も

あった。スコットランドの小説家マーガレット・オリファントは「クリスマスの七面鳥に靈的な限りない力を見いだした最初のもの」と皮肉を込めて評し、ラスキンも「彼のクリスマスは、ひいらぎとプディングを意味していて、死者の復活でも、新しく星々が昇ることでも、賢者の教えでも、羊飼いでない」と述べている⁸⁾。

『クリスマス・キャロル』に宗教色が全くないわけではない。この小説は「神よ、私たちを祝福してください。ひとり残らず」という言葉で結ばれている。現在のクリスマスの靈が見せる幻影では、教会の鐘が鳴って、晴れ着で着飾った人々が礼拝に向かうところがある。内容に直接関わるわけではないが、スクルージの家の暖炉のタイルにはさまざまな聖書の物語が描かれている。このように『クリスマス・キャロル』には、キリスト教的なメッセージや象徴が見られるが、それでもその中心思想が宗教的であるとは言いがたい。次のマーリーの亡霊の台詞では、キリストの誕生にまつわる東方の三博士の話に言及しながら一般的な慈善が教訓として引き出されている。

「めぐりゆく1年の中でこの季節になると、私は一番苦しむのだ」と亡霊は言った。「なぜ、大勢の仲間と共にいながら、目を背けて歩いていたのか。賢者たちをみすばらしいあばらやに導いた、あの聖なる星をなぜ見上げなかったのか。その星明かりに導かれて訪れるべき貧しい家もあっただろうに」(49頁)

この作品のクリスマス観は、クリスマスなんてばかばかしいと言うスクルージに対し、甥のフレッドが言う次のことばに端的に表れている。

「・・・ぼくはいつもクリスマスがめぐってくると—その聖なる名前と起源に払うべき畏敬の念は別として—といっても何であれクリスマ

スに関連するものをそれと別にできるとしたらの話ですが—ああ、いい季節だと思うんです。やさしくなって、人が許せるようになり、思いやりの心をもてる楽しい季節。男も女も、閉ざしていた心を一様に思う存分開いて、身分が下の人たちも墓場に至る旅の道連れのように感じ、行き先の違う別人種だとは思わない。1年の長い暦の中でこんな時は他に知りません。だから、おじさん、ぼくはこれまでクリスマスだからといって金銀のひとかけらがポケットに入ったなんてことはないけれど、ぼくにとってクリスマスはいつも有益だったし、これからもそうだと信じているんです。だから、クリスマスに祝福あれ！とぼくは言います」(36-7頁)

ここではクリスマスが本来イエス・キリストの生誕を祝う聖なる日であることに言及しながらも、神の愛はかっこうにくぐられ、人間同士の友愛が強調されている。これが、この作品の中心思想と言えるだろう。

しかしクリスマスの歴史をたどってみると、その成り立ちは必ずしも聖なるものであるとは言えないのである。

3 クリスマスの起源と歴史

12月25日がイエス・キリストの誕生日とされたのは4世紀になってからである。聖書にはイエス・キリストが何月何日に生まれたという記述はなく、初期キリスト教徒は主の誕生日を祝うことはなかった。クリスマスの起源は、むしろ異教の祭りにあったと考えられる。古代ローマでは冬にサトゥルナリアという祭りがあった。これは春の到来を願って、農耕の神サトゥルヌスを祀るもので12月17日に始まり、一番盛んだった時には1週間続いた。人々は宴会を開いて浮かれ騒ぎ、キャンドルなどのプレゼントの

交換が行われた。普段の規律を破って羽目を外すことが大目に見られ、賭け事も公認された。奴隷も宴席に連なって主人と立場を逆にするなどの無礼講が許されたという。キリスト教教会はこの異教の祭りを取り込み、そこにキリスト教的な意味を賦与する意図でクリスマスを祝い始めたと推測される。北欧やイギリスにもユールと呼ばれる冬の祭りがあった。ローマの祭り同様、1年の一番暗い時期に宴を催して陽気に過ごすものだが、亡霊や悪霊が出てくる時ともされていた。キリスト教の伝来と共にユールもクリスマスに同化される。中世イギリスではユールはクリスマスと同義に用いられ、北欧では現在もこちらの呼び方をしている。ユールログ（クリスマスイヴに暖炉で焚く大きな薪、またそれに似せたチョコレートケーキ）、クルスマスツリー、宿り木を吊す習慣など、クリスマスの風習にはユール起源のものが多い。クリスマスは冬の祭りの習慣をもつ異教徒たちを改宗させる手段であったと言えるが、逆に異教的・世俗的要素をとりいれてしまうという矛盾をかかえることになる。

イギリスでは、中世初期から近代初期に至るまで、クリスマスはあらゆる階級の人々が心をひとつにして楽しく祝う祭りであった。とりわけ支配者階級にはもてなしの精神ホスピタリティが求められ、12日間にわたって祝うようになっていたクリスマスの期間、領主は屋敷の大広間を開放して訪れるすべての人をもてなすものとされた。国王は盛大な祝宴を催し、それは16、7世紀1642-9年のチューダー王朝、スチュワート王朝の時代に絶頂を極める。だが1642-9年のピューリタン革命で大きな変化をもたらされる。教会は当初からクリスマスが放埒になることに危機感をもっていたが、ピューリタンはクリスマスそのものをカトリックの祭りとして嫌悪し、共和国政府はこの習慣を廃止しようとしたのである。

クリスマスの祝い方の変化には政治的要因のみならず社会的要因もあった。14世紀以降たびたび起こるペストの流行の結果、地主はクリスマスホスピタリティのもてなしの対象を親類縁者や同じ階級の者に限るようになっていき、貧し

い人々には食料や燃料を贈り物として与える慈善チャリティーがもてなしに代わった。

16世紀以降、カントリー・ハウス（田舎にある貴族や地主の邸宅）の大広間は小さく改築されたり、いくつかの部屋に仕切られたりするようになる。17世紀になると地主の一部は資本家として事業を始め、冬はロンドンに滞在して田舎のクリスマスの習慣に無頓着になっていったという。だがクリスマスの習慣が完全にすたれることはなく、家庭において祝われ、また保守的な地方地主の屋敷では宗教的・社交的行事として命脈を保った。¹⁰⁾

19世紀になってクリスマスは再び脚光を浴びるようになる。アメリカの作家ワシントン・アーヴィングの『スケッチブック』（1819年）にはイギリスのクリスマスの様子、カントリー・ハウスで過ごしたクリスマスの体験が描かれる。そこに登場するプレイスブリッジ氏は「古いイギリスのホスピタリティーホスピタリティーもてなしのなにかしかなを守ること誇りをもっている」、「今日ではその純粋種はめったにお目にかかれぬ、昔のイギリス地方紳士の典型と言ってよく」、「昔の田舎のゲームや祭日のしきたりを復活させることの熱心な唱道者」である。¹¹⁾アーヴィングは虚実織り交ぜて、歌、踊り、ゲーム、ディナーでもてなされ、チャペルに礼拝に行く、理想化された古き良きクリスマスを描いた。ディケンズはアーヴィングの強い影響の下、『ピックウィック・ペーパーズ』（1836-7年）28章で、ディングリー・デルのウォードル邸でのクリスマスを描いている。

4 『クリスマス・キャロル』に描かれたクリスマス

だがディケンズがクリスマスを創った、と言われる。それは『ピックウィック・ペーパーズ』の6年後に書かれた『クリスマス・キャロル』が、それまでのクリスマスの伝統を塗りかえ、それ以降現在に至るクリスマスのイメージを形成するほどに大きな影響力をもったからである。アーヴィ

ングが描いたカントリー・ハウスでの12日間のお祝いは、ロンドンに舞台を移し、一晚だけの、フェジウィグ氏の店の気取らない舞踏会、ポップ・クラチットや甥のフレッドの家でのホームパーティになった。クリスマスの担い手が地方地主から都会の中下層階級に変わったのである。その一方、¹²⁾クリスマスのさまざまな伝統はこの作品においても形を変えて継承されている。フェジウィグ氏の店では踊り、フレッドの家では歌とゲーム、クラチット家ではつましやかであるが、鶯鳥やクリスマス・プディングのある晩餐が営まれる。現在のクリスマスの霊が現れた時、スクルージは、ひいらぎや宿り木と共にさまざまな肉や果物、菓子、パンチの幻影を目にするが、それはカントリー・ハウスでの豪華な食事を思わせる。ところが、その霊がスクルージを連れていった町では、果物屋や食料品店においしいようなものがあふれ、買い物客でにぎわっていて、かつてのぜいたくな宴会は、現代の消費社会の原型とも言えるような、活気に満ちた商店街に変わっている。また若い奉公人だったスクルージをも差別しないフェジウィグ氏の舞踏会にはクリスマスの^{ホスピタリティー}もてなしの精神が見られ、スクルージが初め、貧しい人々への寄付を拒否しながら、改心後、自ら寄付を申し出るプロットで^{チャリティー}慈善の精神が説かれている。

ディケンズのこの新しいクリスマスは、ヴィクトリア時代の読者に熱狂的に迎え入れられた。1843年12月19日に発売された『クリスマス・キャロル』の初版6千部はまたたく間に売り切れ、翌年5月までに7版を数えたという。当時の書評は、読者の購買意欲をそそるために作品の抜粋を掲載するのが常であったが、よく引用されたのは、フェジウィグ氏の舞踏会、クリスマスの町の様子、クラチット家の晩餐、甥のフレッドの家でのパーティーの場面だったという。¹³⁾なかでもクラチット家のクリスマスが、すでにエリザベス・バレット・ブラウニングとメアリ・ラッセル・ミットフォードの反応でも見たように、一番人気があった。貧しくとも感謝の気持ちを忘れず、互いに信頼しあって幸福でありながら、病弱な末息子のティム

を抱えるボブの家庭が、ヴィクトリア時代の倫理観とセンチメンタリズムに最も訴えかけたのだろう。いずれにせよ現代に至ってもなお『クリスマス・キャロル』が色あせないのは、随所に見られる、人生を謳歌する人々の生き生きとした描写のゆえである。

キリスト教的な立場からのクリスマスの意味は、キリストの受肉にある。受肉は十字架上の死とその後の復活の前提となる出来事であり、この受難と復活が救いをもたらすことになる。だが甥のフレッドはクリスマスの「聖なる名前と起源に払うべき畏敬の念は別として」おり、ラスキンが『クリスマス・キャロル』には復活がないと批判した。スクルージは未来のクリスマスの霊によって自分の墓を見せられるが、目覚めるとまだ生きていることに気づく。ティムも未来のクリスマスの霊が見せる幻影では死んでいたが、最後に至って実は生きていたことが分かる。ふたりとも復活を遂げたといえるが、その前の死は本当の死ではない。むしろ春の訪れを前にした冬のような仮の死と言える。

スクルージの性格は初め、冬のイメージで描かれる。

彼の心の冷たさが、年老いた顔を凍らせ、とがった鼻をこごえさせ、頬をしわだらけにし、歩き方をこわばらせ、目を赤く、薄い唇を蒼くした。そして耳障りな声でがなりたてるのだ。白い霜が頭にも、眉毛にも、ごわごわのあごひげにも降りていた。どこへ行くにもこの低体温のままだったから、夏の盛りに事務所は冷え切り、クリスマスだからといって一度たりとも温度が上がることはなかった。(34頁)

一方、最後に彼が目覚めたときには、クリスマスの朝を迎えている。教会の鐘の音に誘われて窓を明けると、そこは寒くはあるが、現在のクリスマスの霊によって見せられた霧に覆われた光景とうってかわって光に満ちあふれている。

もやもない、霧もない。澄んだ、明るい、陽気な、浮き浮きする冷たさ。寒風に血も踊る冷たさ。金色の日光、神々しい空、気持ちのいいさわやかな空気。楽しい鐘の音。ああ、素晴らしい！素晴らしい！（112頁）

教会の鐘の音が鳴り響いてはいるが、真冬にあって春を予感させるこの朝の情景には、春の訪れを待ち望む祭りであったサトゥルナリアやユールの精神が反映されているといえよう。スクルージの改心は宗教的帰依ではなく、死なずに済んだという喜びによってもたらされている。「マーリーは死んでいた」で始まるこの小説の結末は、死を予言されたスクルージが生き延びることであり、冬を堪え忍んで春を迎えたときの喜びを想起させる。『クリスマス・キャロル』のメッセージは生きることのすばらしさであり、この作品で死は否定的なものにとらえられているのである。

5 もうひとつの『クリスマス・キャロル』

ボブの末息子ティムは、クラチット家のクリスマスの団らんの場面に登場したとき、弱々しく松葉杖をついている。それを目にしたスクルージが、「ティム坊やは生き続けるのでしょうか」と聞くと、現在のクリスマスの霊は、からっぽの席と持ち主のいない松葉杖が見えると言って、彼の死を予言する（82頁）。そして、未来のクリスマスの霊がスクルージをクラチット家に連れていったときには、ティムは亡くなっており、残された家族は悲しみに沈みつつも互いの絆を強めている。ところが最後に至って、「そして死んではいなかったティムにとって、彼（スクルージ）は第二の父親になった」（116頁）とのひと言で、ティムがその後も生き延びたことが示される。

実はこの一節はディケンズが校正段階で加筆したものである¹⁴⁾。原稿ではティムは死ぬことになっていた。『ピックウィック・ペーパーズ』29章に『クリスマス・キャロル』の原型となった話（偏屈な墓堀りのゲイブリエル・グラブが、クリスマスの日に鬼たちに幻影を見せられその結果改心する）があるが、その幻影では、ある家族の幸福な一家団欒の様子が現れ、次にその家の一番小さな子供が死ぬ場面が現れる。

だがほとんど気づかぬうちに、その光景に変化が起きた。場面は小さな寝室に移り、そこで一番かわいい、一番年下の子供が横になって死にかけていた。その頬は薔薇色を失い、その目は輝きを失っていた。そして墓堀りがそれまでに感じたことのない興味をもってまきに見守っている間に、その子は死んだ。彼の幼い兄弟姉妹が小さなベッドのまわりに集まり、彼の小さな手をつかむと、冷たく重かった。彼らはその感触に手を引っ込め、畏怖の念をもってそのあどけない顔を見つめた。それは穏やかで落ち着いていて、美しい子供は平穏とやすらぎの中で眠っているようだったが、彼らはその子が死んでいるのを悟り、いまや天使となって輝かしい幸せな天国から自分たちを見下ろして祝福を与えているのを知っていた¹⁵⁾。(360頁)

ディケンズ自身、子供の頃、弟と妹を亡くしている。アルフレッド・アレンは1814年、ディケンズが2歳半の時、生後7か月で世を去った。ハリエット・エレンは1822年、3歳で死に、このときディケンズは10歳だった。子供が死ぬことはヴィクトリア時代にはまれなことではなかった。しかし『クリスマス・キャロル』では最後に至って、ティムを生きていたことにし、ハッピーエンドが強調されている。

『ピックウィック・ペーパーズ』の上の引用に続く箇所では、この家族のその後が描かれる。やがて父親と母親は年老いて安らかな死を迎える。

両親より長生きした子供たちはわずかだった。残された者たちは墓の前でひざまずき、涙をこぼすが、絶望して泣き叫んだりはない。というのも「いつの日か再会することを彼らは知っていた」からである。そして「再びあわただしい世間と交わり、満足と陽気さを取り戻した」(360頁)。死を受容するこのエピソードと、ひたすら生を強調する『クリスマス・キャロル』最終版は対照的だ。だが仮にディケンズが校正段階でひと言加筆することがなかったら、スクルージは生き延び改心するが、ティムの運命はそのままだ。未来のクリスマスの霊が見せる、クラチット家の人々がティムの死を悲しんでいる情景は、本当に起きる出来事ということになるのである。

6 メアリ・ホガースの幻影

発表された『クリスマス・キャロル』にあって、夭折する唯一の不幸な人物が、スクルージの妹のファンである。彼女は、過去のクリスマスが見せる幻影に登場する。少年スクルージが、クリスマスなのに家に帰れず、たったひとり寄宿学校に残っているところにファンは現れ、厳しかった父親が優しくなってスクルージの帰宅を許したので迎えに来たと、明るくはしゃいで兄の手を引っ張る。ふたりは恐ろしい校長に別れのあいさつを済ませると、喜び勇んで馬車に乗り雪道を帰っていく。この幻影を見たスクルージと過去のクリスマスの霊との会話で、ファンは病弱で、結婚後子供をひとり産んで死んだこと、その子が甥のフレッドであることが明かされる。

ファンは、ディケンズの姉ファニーがモデルになっていると指摘されている¹⁶⁾。だがモデルと作中人物が同名であることはむしろまれであり、ファニーは、クラチット家の長女マーサのモデルでもあるとされている。また

『クリスマス・キャロル』が書かれたころ彼女はまだ生きていた。これに対しファンは、スクルージより「ずっと年少」でリトル・ファンと呼ばれ、小さくて手を伸ばしても兄の頭に届かず、子供らしい無邪気な少女として描かれている。ファンのモデルになりうる人物は他にいないのだろうか？

ディケンズがその生涯において経験した最も衝撃的な出来事といえるのは、メアリ・ホガースの死だった。彼女は妻キャサリンの妹でディケンズより8歳年下、彼が初めてホガース家を訪れたときには14歳だった。メアリは姉の付き添い役としてディケンズと懇意になり、ふたりの結婚後は頻繁に新婚家庭を訪れ、キャサリンが妊娠、出産すると姉に代わって家事をきりもりした。彼女は美しく、快活な性格だったとされる。1837年5月6日、メアリはディケンズ夫妻と芝居見物をした後、ディケンズ家に泊まるが、夜半過ぎに心臓発作を起こす。悲鳴を聞いたディケンズが部屋に駆けつけると重篤で、医者と呼んだがもはや為すべはなかった。彼女は翌日の午後ディケンズの腕のなかで眠るように息を引き取る。メアリの死に対してディケンズは異常な愁嘆ぶりを見せた。彼はメアリの指輪をはずすと自分の指にはめ生涯はずさなかった。メアリに贈ったロケットに彼女の髪を入れて自分のものとし、彼女の衣類をすべてとっておき折にふれては眺めた。「若く、美しく、善良で、神は慈悲により、彼女を17歳の若さで天使の仲間に加えたもうた」という墓碑銘を書き、自分が死んだらメアリの横に埋葬されることを切に望んだという¹⁷⁾。

ディケンズのメアリへの思慕は、まだ彼女が活着している頃、妻キャサリンの妊娠がきっかけで始まった、とアクロイドは推測している。ディケンズは子供の頃への強いノスタルジアをもっていた。キャサリンが妊娠によって責任ある大人の世界に入っていったのに対し、17歳のメアリはディケンズにとってはまだ子供の世界に属し、一緒にいることで子供の心を取り戻せる存在だったという。ディケンズ¹⁸⁾にとって理想の少女だったメアリは

死によって永遠の少女となった。メアリは『骨董屋』（1840-1年）のヒロインで夭折するリトル・ネルのモデルになっている。『クリスマス・キャロル』のファンは、ディケンズの知るメアリより幼いが、まさに子供の世界に属する無邪気な少女と言えるだろう。メアリと異なりファンは結婚し子供を産んだことになっている。しかし大人になってからのファンについての具体的な記述はない。その後に登場するスクルージの婚約者については、彼と別れた後、別の男性と結婚し大勢の子宝に恵まれて幸せに暮らす様子が描かれるが、それと対照的である。ファンの結婚と出産は、フレッドをスクルージの近親者（甥）に設定したのでプロット上必要だったと思われる。永遠の少女たるべきファンは結婚・出産したら死ぬ運命だったとも言えよう。いずれにせよ過去のクリスマスが見せる幻影において彼女は無邪気でかわいい妹に留まったままだ。ファンのエピソードには、ディケンズのメアリ体験が影響していると見てよいだろう。

ディケンズは1851年、『家庭のことば』クリスマス特別号に書いた「歳を取るにつれてのクリスマスの意味」という短いエッセイで、クリスマスを「死者たちの都市」に目を向け、「そのもの言わぬ集団から、わたしたちが愛していた者たちを迎え入れる」時であるとして、死者を偲んでいる。「暖炉のそばに、生きている子供たちに混じって、いかにもおごそかに、美しく舞い降りてきている子供の天使たち」を見ることができる、と彼は言う。この年の4月、ディケンズは娘のドラを幼くして亡くした。また障害をもった少年と、その子を残して先に逝くことを悲しんだ母親がいたが、その子も早くに亡くなって母の胸に抱きとめられ、（今はあの世で）母が子の手を引いている、と言う。この母親がディケンズの姉のファニーで、彼女は1848年に死んだ。息子は翌年亡くなったハリー、足が悪く、『クリスマス・キャロル』のティムのモデルとなった。そして「ほとんど大人の女性になりかかっていたが、決してなることはなかったといひ少女がいた」と言って、メアリに言及するのである。¹⁹⁾

ディケンズは楽しいクリスマスを描いた『ピックウィック・ペーパーズ』の28章でも、かつて共にクリスマスを祝った人々について「当時、陽気に脈打っていた多くの心は、今は鼓動を止め、当時輝いていた多くののかんばせは、光ることをやめた。わたしたちがつかんだ手は冷たくなり、わたしたちが求めた目は輝きを墓の中に隠した。それでも、古い家、部屋、陽気な声、笑顔、冗談、笑い、あの楽しい集いに関連したほんの些細で取るに足らぬ事どもが、この季節がめぐってくるごとに、まるで最後の集まりがきのうであったかのように、わたしたちの心に押し寄せてくるのだ」と述べている（335頁）。ここにすでに、楽しいだけではないクリスマスが現れている。この後、中年になって悲しい死別をいくつも体験したディケンズは、「歳を取るにつれてのクリスマスの意味」で死者を偲ぶ時としてのクリスマスを強調したのである。

『ピックウィック・ペーパーズ』と「歳を取るにつれてのクリスマスの意味」の間に書かれた『クリスマス・キャロル』にも同じテーマが見られないだろうか。楽しいクリスマスのエピソードのゆえにこの作品が人気を博したことはすでに述べたが、過去のクリスマスの霊が見せる幻影と現在のクリスマスの霊が見せるそれとは少し意味合いが異なる。すなわちスクルージがかつて奉公していたフェジウィグ氏の店での舞踏会は、今は亡きフェジウィグ氏を偲ぶよすがになっているとも言えるし、ファンクの死が明確に語られる彼女のエピソードはそれ以上に追悼の意味合いが強いと言えよう。生の讃歌を前面に押し出した『クリスマス・キャロル』にもそれとは違う側面が見られるのである。

7 『クリスマス・キャロル』と死

『クリスマス・キャロル』に死者を偲ぶというテーマがあるとするなら、

ゴースト・ストーリーという設定も単なる仕掛けにすぎないとは言いきれないかもしれない。主人公の前に友人の亡霊が現れ、さらに過去、現在、未来の霊が主人公を導くという構図はいかなる発想に基づくものなのか。

『クリスマス・キャロル』発表直後より、現在のクリスマスの霊とスクルージの旅には、ル・サーージュの『悪魔アスモデ』との関連が指摘されてきた。この小説は、悪魔のアスモデが、閉じこめられていたフラスコの中から助け出してくれた学生サンプリヨに、お礼としてマドリードの家々の屋根をはがして、そこで営まれるさまざま人生を見せるという筋立てになっている。ディケンズがここからヒントを得た可能性は高い。しかしそこに見られるのは、主に人間の愚かさや卑しさであり、また単に家々の中の様子をのぞくのではなく、そこにいる人々にまつわる裏話を、すべてを知っているアスモデがサンプリヨに語り聞かせる形をとっている。サンプリヨは、アスモデの力を借りて火事から救い出した令嬢と最後に結ばれるが、それ以外は話の聞き役に過ぎず、人間的に成長することもない。

一方、ダンテの『神曲』の影響も初期の書評では指摘された。ダンテがウェルギリウスに導かれるように、スクルージはクリスマスの霊に導かれて旅をする。性質は異なるが、ふたりとも救いに至る点でも共通している。ハーンは加えて、いずれの話も3日間の旅で、『神曲』の場合は復活祭、『クリスマス・キャロル』はクリスマスという聖なる時に起きている、などの類似点を指摘している²¹⁾。ただ『神曲』が来世の旅であるのに対し、『クリスマス・キャロル』は現世の旅である。

ヴィクトリア時代は、物質文明の発達に伴い、それに対する反動として超常的、霊的なものへの関心が高まり、教会の権威が衰えるにつれて、人々がそれに代わるものを求めた時代だった。この時代に流行したオカルト思想のひとつに、メスメリズムがあった。これは「動物磁気」（人間や動物に宿るとされる力・気）に基づいた催眠療法の一種でドイツの医学者メスマー（1734-1815年）によりあみだされたものである。その信憑性は常に

論争的になったが、19世紀の終わりまで信奉者がいたという。ディケンズは1838年からメスメリズムに凝り始め、妻のキャサリンや義妹ジョージアナに催眠術をかけたほか、医者でもないのに、1844年ジェノバに滞在した時からその後数年にわたって、神経衰弱を患うドウ・ラ・リユー夫人なる人物に催眠療法を施している²²⁾。このメスメリズムを取り入れたオカルト思想書に、ユンク＝シュティリンクの『霊物理学の理論』がある。この本は1834年に英訳がロンドンで出版されディケンズも所蔵していた。それによると、生来の素質をもった人なら、動物磁気、神経障害、精神の絶えざる努力その他の原因・手段によって、現世にありながら肉体から魂を離脱されることができるし、短時間体外離脱をして遠くで何か行い、また肉体に戻ってくるのできる人もいるという。実際に、友人に会うことを強く望んだ病人が、病床で意識不明になっているときに遠く離れた友人の前に姿を現した例や、フィラデルフィア近郊に住む霊能力者が、なかなか帰国しない船乗りの夫の身を案ずる女性の依頼を受け、体は自室のソファに横たわったまま、ロンドンのコーヒーハウスにいる夫の前に姿を現して帰国を促した例があるという²³⁾。スクルージも床についている間に（他人に目撃されることはないが）時空を移動しているので、彼の旅は体外離脱した魂の旅とも考えられる。

『霊物理学の理論』では、亡霊も重要なテーマとして取り上げられ、多くの亡霊の話は虚偽や迷信からきているが、死者の霊が実際に戻ってくることも確かであるとの主張がなされている²⁴⁾。ディケンズは亡霊にとっても興味を抱いていた。「私はこの（亡霊の）問題に常に強い関心をもっており、それを追究する機会をみすみす取り逃がすことは決してない」と彼は語っている。彼の蔵書には、亡霊を幻覚とするサミュエル・ヒバートの『幽霊の哲学についてのスケッチ』（1824年）、その実在性を主張するロバート・デイル・オーウエンの『あの世の境界での足音』（1860年）のいずれもが含まれ、さまざまな書き込みがなされている。また亡霊についての実話集

として人気を博した、キャサリン・クロウの『自然の夜の側もしくは亡霊および亡霊の目撃者たち』(1848年)も持っていた。²⁵⁾

キャサリン・クロウの次の一節は当時の人々の亡霊に対する見方をよく物語っていると言えるだろう。

わたしたちは近年、幽霊や幽霊屋敷は無知な時代の空疎な作り事だった、ということは確定した事実として解決済みであるとしてきた。そのような空想の産物は迷信の黄昏の中に漂っていたに過ぎず、この啓蒙された時代には永遠に消えてしまったものと安んじて思いこんできた。・・・それでは次の事実になんと言おう。ここにまだ幽霊と幽霊屋敷が存在する。・・・何年にもわたって幽霊どもは、身分ある一家の静寂を乱し、賢い人々の不信、好奇心旺盛な連中の調査、そして悩まされている一家の人々による不安な寝ずの番におかまいなく、出没し続け、騒がせ続けているのである。(106頁)

ヴィクトリア時代は、ある意味で現代にも似て、不可思議なものに対し、アンビヴァレントな見方が交錯した時代であり、ディケンズはそんな時代の申し子だった。クリスマスの楽しく心温まる物語として親しまれている『クリスマス・キャロル』の超自然的な設定の背景にはこのようなオカルト趣味の流行と、それに対するディケンズの並々ならぬ関心があったのである。

だがそれだけではない。ディケンズ自身、夢においてではあるが亡霊を見たことがあった。それは恐ろしい霊ではなく、メアリ・ホガースの霊である。彼はメアリの死後、何か月にもわたって毎晩彼女の夢を見続けたという—

彼女が死んだ後、何箇月も毎晩彼女の夢を見続けました—それは半年

以上に渡ったと思います一時には霊として、時には生きた人間として彼女は現れましたが、リアルな悲しみの苦痛を感じたことは一度もなく、いつも一種のおだやかな幸福感に包まれました。それは私にとってとても心地よいものとなったので、夜寝るとき、その幻影がなんらかの姿で戻ってきてくれるよう願わずにはいられませんでした。そして実際そうなったのです。(1843年5月8日付ホガース夫人(メアリとキャサリンの母)²⁶⁾宛)

ディケンズが妻のキャサリンにこの夢のことを話すと、それ以後彼女の霊は現れなくなったという。ところがその後何年かたってディケンズはもう一度夢でメアリの霊に会う。1844年イタリアのベスキエラに滞在していたとき、ディケンズは発作を起こし、その時、メアリの霊に会ったことばを交わしたという。友人フォスターに当てた手紙によると、ディケンズはある晩、背中にリウマチの痛みを感じ、それが腰に回って「苦痛の帯のように」なった。痛みでほとんど一晩中眠れなかったが、ようやく眠りにつくと次のような夢を見た。彼はどこか不明瞭な、そしてそれゆえ荘厳な雰囲気のところにいた。そこにラファエロの聖母のような、髷のある青い服をまとった霊が現れ、顔ははっきりしなかったが、それがメアリだと分かった。彼女はディケンズに対して「同情と悲しみに満ちて」いた。本当にあなたが来たことの証拠を与えて欲しいとディケンズが言うと、「願い事をしなさい」と霊は言う。「ホガース夫人は大変な苦難に囲まれています。あなたは彼女を救ってくれますか」と問うと「はい」と答える。「本当の宗教は何ですか。私が思っているように、良いことをしようとするなら、宗教の形式はそれほど問題ではないと思いますか。それとももしかするとカトリックが一番ですか。カトリックでは神のことを頻繁に思いようになり、より堅固に神を信ずるようになるのですか。」このように問うと霊は「あなたにとってはそれが一番です」と答えたという。目覚めた後、自分

の見た夢は、部屋に祭壇があったり、夜中に修道院の鐘の音を聞いていたりしたのが原因ではないかと考えてみたが、それでもそれが夢なのか本物のヴィジョンなのかわからない、とディケンズは書いている。²⁷⁾

実はディケンズはメアリの死をきっかけに信心深くなっている。彼は近くのグレート・コーラム通りにある孤児院ファウンドリング・ホスピタルの礼拝堂に規則正しく通うようになった。ディケンズの信仰心は全く個人的な体験に起因するもので、宗派にとられるものではなかった。右の夢でディケンズにとってカトリックが一番とメアリの霊が言ったのは、ディケンズ自身が疑っているように、その時イタリアにいたという事情が影響しているように思われる。以前の夢では時に霊として時に生身の人間として現れたメアリは、ここでは聖母マリアの姿になっている。夭折し、彼岸の世界からディケンズに慈悲を施すところはダンテにとってのベアトリッチェを思わせる。メアリが死んだ後、ディケンズはなによりも、「いつの日か悲しみも別離もないところで彼女に相まみえるという思い」によって慰められたという。²⁸⁾

『ピックウィック・ペーパーズ』のゲイブリエル・グラブが見た一家の場面や、「歳を取るにつれてのクリスマスの意味」でのファニーとハリーの親子への言及にもあるように、ディケンズはあの世で愛する人に会えるという考え方を作品においてくり返し表明している。メア리를主人公トル・ネルのモデルとした『骨董屋』の最後では、少年のころネルに憧れていたキットが、自分の子供たちにネルの話をし、彼女は天国に行ったと言う。そしてもしネルのように善良であったなら、おまえたちもいつかそこに行くことができ、父さんが子供だったころのように、ネルに会えるかもしれないと語り聞かせる。²⁹⁾ こうした来世での出会い、再会の期待は19世紀後半になるとむしろ高まっていった。天国のイメージが、神の住む聖なるところから家族再会の場に次第に変化するという、いわば天国の世俗化現象が起きたためである。³⁰⁾

しかし『クリスマス・キャロル』にはそういう表現は出てこない。マリーーの亡霊の出現やクリスマスの霊との旅といった超自然の仕掛けを持ちながら、『クリスマス・キャロル』の世界はあくまで死のこちら側にとどまり続ける。ファンの登場する場面は、アーヴィングの「駅馬車」(『スケッチブック』)にも描かれた、クリスマスにまつわる楽しい情景のひとつである「クリスマスの帰省」のエピソードが主で、彼女の死は後日談として、スクルージと過去のクリスマスの霊との短いやりとりの中で示されるだけだ。だがその簡潔さが現代の読者にはかえって余韻を残し、断ち切れない死者への思いを感じさせるのである。

註

- 1) *A Christmas Carol and Other Christmas Writings*, ed. Michael Slater (Penguin, 2003). 『クリスマス・キャロル』の引用頁数はこのテキストに拠る。
- 2) Paul Chambers, *The Cock Lane Ghost* (Phoenix Mill; Sutton, 2006), pp. 143-45, 156-63, 182, 203-04, 217-18. E. J. Clery, *The Rise of Supernatural Fiction 1762-1800* (Cambridge UP, 1995), pp. 13-32. Terry Castle, *The Female Thermometer* (Oxford UP, 1995), p. 151.
- 3) Alain René Le Sage. *The Devil upon Crutches*, trans. Tobias Smollett, ed. Brack and Chilton (Athens and London: UP of Georgia, 2005), pp. 56-58. 邦訳 ル・サージュ『悪魔アスモデ』中川信訳『集英社版 世界文学全集 6 悪漢小説集』, 1979年。Paul Schillicke, ed., *Oxford Reader's Companion to Dickens* (OUP, 1999), p. 322. Michael Patrick Hearn, ed., *The Annotated Christmas Carol* (Norton, 1976), p. 86.
- 4) 'A Christmas Tree', *A Christmas Carol and Other Christmas Writings*, pp. 242-46. Washington Irving, 'The Christmas Dinner', *The Legend of Sleepy Hollow and Other Stories*, ed. William L. Hedges (Penguin, 1999), p. 188.
- 5) David Parker, *Christmas and Charles Dickens* (New York: AMS, 2005), pp. 104-05, 181. Hearn, p. liv.
- 6) *The Brownings' Correspondence*, ed. Philp Kelley and Ronald Hudson, vol. 8 (Winfield, Kans.: Wedgestone Press), p. 113. 'To Miss Jephson, Castle Martye, Ireland', [about July, 1845], *The Life of Mary Russell Mitford*, ed. Rev. A. G. K. L'Estrange, vol. II (New York: Harper & Brothers, 1870), p. 286.
- 7) 現在のクリスマスの霊が最後に見せる、『無知』という名の男の子と『欠乏』という名の女の子だけが例外である。この2人は全く寓意的で、中世の道徳劇やバニヤ

- ンの『天路歷程』の登場人物を思わせる。
- 8) Hearn, p. lxxxvii. *The Works of John Ruskin*, ed. E. T. Cook and Alexander Wedderburn, vol. 37 (London: George Allen, 1909), p. 7.
 - 9) J. M. Golby & A. W. Purdue, *The Making of the Modern Christmas* (1986. Phoenix Mill: Sutton, 2000), pp. 20-24.
 - 10) Parker, pp. 38, 48, 65.
 - 11) Irving, 'Christmas Eve', *The Legend of Sleepy Hollow and Other Stories*, p. 159.
 - 12) *A Christmas Carol*, ed. Richard Kelly (Ontario: Broadview Press, 2003), p. 21.
 - 13) Hearn, p. lvii.
 - 14) Hearn, p. 159.
 - 15) *The Picwick Papers*, ed. James Kinsley (OUP, 1988). 『ピイクウィック・ペーパーズ』の引用頁数はこのテキストに拠る。
 - 16) Hearn, p. 62. Peter Ackroyd, *Dickens* (1990. New York: Harper Collins, 1992), p. 410.
 - 17) Ackroyd, p. 228.
 - 18) Ackroyd, pp. 226-27.
 - 19) 'What Christmas Is, As We Grow Older', *A Christmas Carol and Other Christmas Writings*, pp. 250-51.
 - 20) Hearn, p. 86.
 - 21) Hearn, p. 43.
 - 22) Schlicke, p. 375. Ackroyd, p. 243.
 - 23) Fred Kaplan, *Dickens and Mesmerism* (Princeton UP, 1975), pp. 16-17. Jung-Stilling, *Theory of Pneumatology*, trans. Samuel Jackson (1834. New York: J. S. Redfield, Clinton Hall, 1951), pp. 46-49, 228-29.
 - 24) Jung-Stilling, p. 137.
 - 25) Ackroyd, p. 358. Kaplan, p. 4. Samuel Hibbert, *Sketches of the Philosophy of Apparitions* (Edinburgh: Oliver & Boyd, and London: G. & W. B. Whittaker, 1824). Robert Dale Owen, *Footfalls on the Boundary of Another World* (1860. Philadelphia: J. B. Lipincott & Co., 1868). Catherine Crowe, *The Night Side of Nature or Ghosts and Ghost Seers* (London: George Routledge and Sons).
 - 26) *The Letters of Charles Dickens, the Pilgrim Edition*, ed. Madeline House, Graham Storey, Kathleen Tiltonson (Oxford: Clarendon, 1974), vol. 3, pp. 483-84.
 - 27) *Letters*, vol. 4, pp. 195-97.
 - 28) Ackroyd p. 228.
 - 29) *The Old Curiosity Shop*, ed. Elizabeth M. Brennan (OUP, 1998), pp. 553-54.
 - 30) Pat Jalland, *Death in the Victorian Family* (OUP, 1996), p. 276.